



【香月泰男 絵画シリーズ】

1947年5月17日、シベリヤの最後の点呼が行われた。いよいよ復員船恵山丸乗船の日である。これさえ通過すれば、もうだれからも拘束されることのない、自分の身体になるのだ、と思うと、はげしい空腹感もなくなった。汚れきった作業衣の中のをやせた肉体に感謝せずにはいられなかった。多くの友が故国を見ずして、シベリヤの露と消えて行ったのに、よくも今日まで持ちこたえてくれたと一。

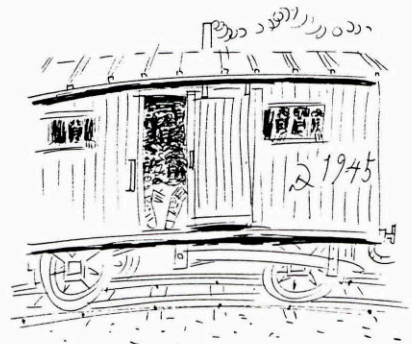
題名 点呼 (左)、(右) 1971年制作 (各 73.0 × 117.0)

国後に備えることもできま
した。

収容所の東方をエニセイ河
が流れ、夏は上流で伐採され
た材木が流されるこの川も冬
が近づくと流木のまわりに氷
がつきはじめ、岸からも氷が
張り、ある朝突然水の流れは
氷の下に隠されます。やがて
氷は厚くなり、その上をチェ
ーンをまいた大型トラックが無
造作に走りはじめます。

「表面を鈍い銀色に光らせ
て目の前に大きく蛇行して横
たわっている凍河をながめて
いると、自然の中における人
間の小ささを感じた。戦争、
争い、憎しみ、苦しみ……、
あらゆる人間の営みがあり
にも卑小に思えてくるのだっ
た。なぜ自然はいつも変わらず
美しいのに、人は変わり醜くあ
りつつけるのか。そんなとき
ふと目を返して自分をとらえ、
私が絵かきとして私がそこに
いなければ自然の美しさも何
ものでもない。私にしかとら
えられない美しさがある。そ
して私は絵かきとしてそこに
いる。単なるひとりの日本人
捕虜としてそこにいるのでは
ない。そう考えてくると、奇
妙な幸福感のようなものさえ
感じる事ができた。」とチェ
ルノゴルスク時代について書

かれています。



ダ モイ (帰国)

セーヤの収容所で軍医に呼
ばれてはじめて画家として描
き出し、その特権ゆえに他の
兵隊達のような重労働からも
解放され、タバコや食糧など
も手に入るようになってきま
す。先生は仲間へのうしろめ
たさから、逆に他の兵達と一
緒に仕事をしていた方がよい
と思ったのです。

このジレンマこそ、後の
『シベリヤ・シリーズ』成立
の要因だと私は思います。兵
隊の時から画家としての目を
もちつづけ、他の軍人仲間と
は別な空間に生きたがゆえに、
そして絵を描くことへの執着
のゆえ生きのびたこと自体、

北へ西へ(スケッチより)

他の兵隊、ことに故国の
土を踏むことなく斃れた
仲間への負い目となって、
生涯消えることはなく、
その負い目ゆえに『シベ
リヤ・シリーズ』が成立
したということになるの
です。

多くの画家達が戦争に
かりだされていきました。
従軍画家を除けば彼等は
兵になると共に画家であ
ることを放棄しました。
それゆえに戦後それぞれ

の画業にたちかえりながら、
先生のように戦争にこだわ
りつづけなくてすんだのでは
ないでしょうか。

昭和二十一年(一九四七年)
四月、先生は待ちに待ったダ
モイ(帰国)の貨車が来てい
ることを知らされるのです。
一年近く待ちに待ったものが
何の予告もなしに実現したこ
とが信じられず、貨車が止ま
るとその都度下車させられる
のではないかと不安になった
と言われます。

収容所に来るときは白一色
だったシベリヤ鉄道の沿線も
縁につつまれ、帰国する先生
達の気持ちに合わせて自然ま
でが変容したようだったと書
いていらっしやいます。